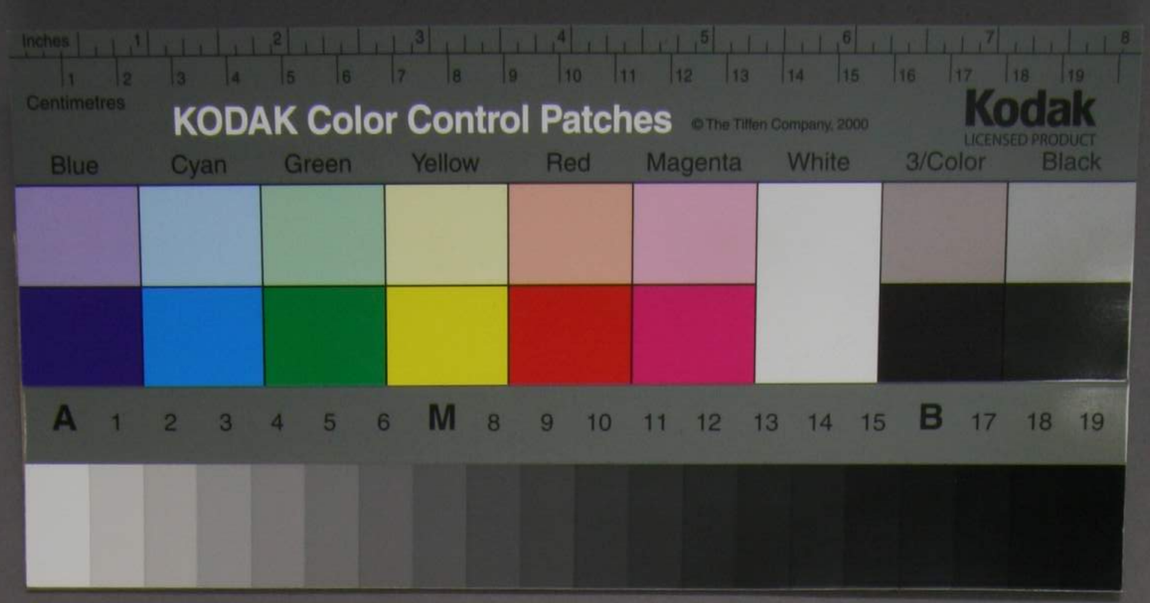
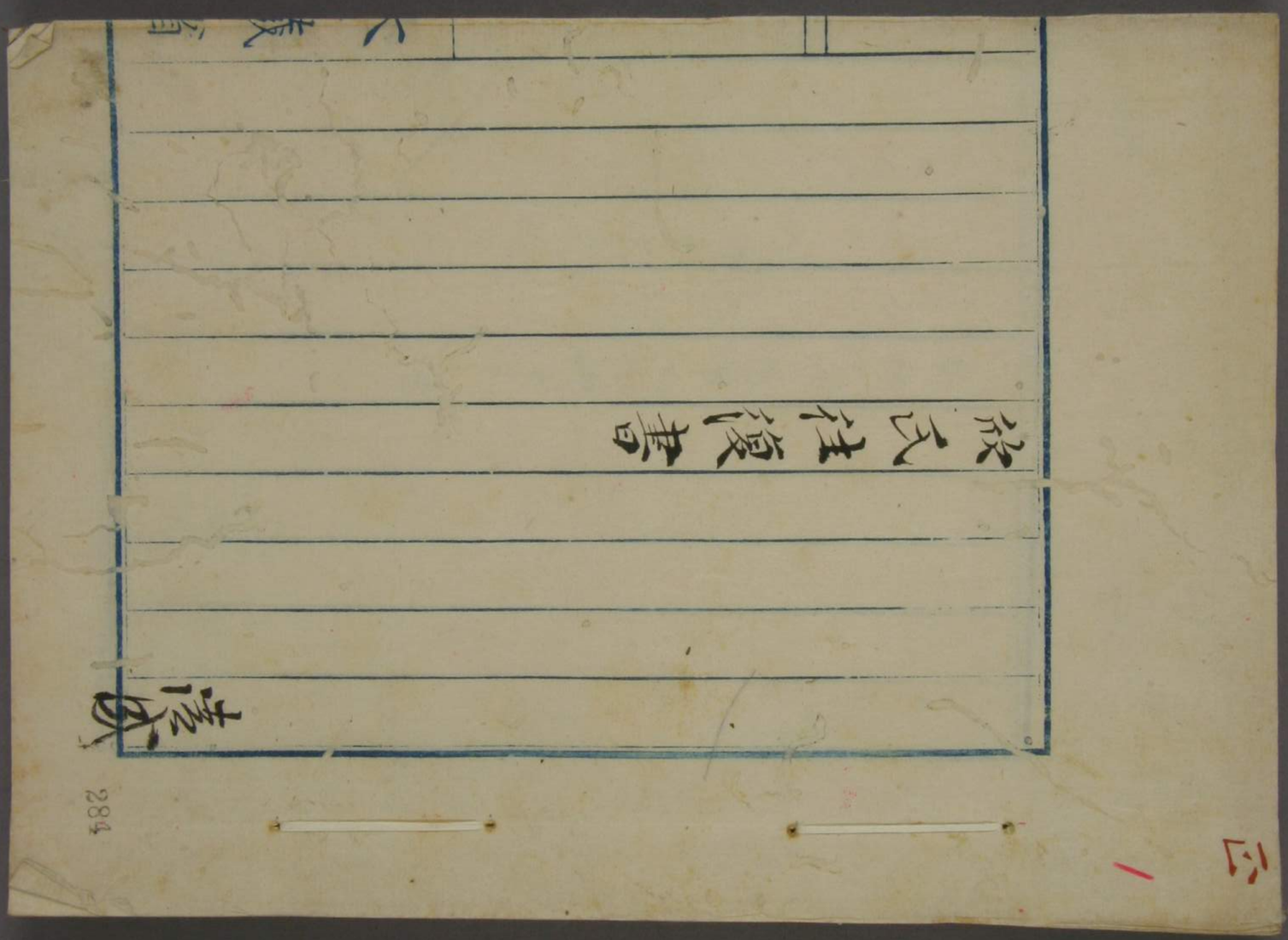

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


於元年後十月日

414
A2136

大蔵省

発程ノ時携帯セル御ヨリノ書

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

大坂造幣寮ニ於テ
造幣首長
トーマス、ウヰルリヤム、キンドル、足下

炎熱之候愈御清福欣抃之至リニ候偖項日之候各
政府諸官員ヘ九ヶ月間之休暇ヲ賜リ候ニ付
吉田少輔ニハ航海旅行致シ京摂両道遥之
筈ニ候就テハ其地ニモ暫時歩ヲ駐メ可申筈
ニ抔兼而先般ノ来當省ト足下トノ間ニ往復ノ
文書上彼此隔靴搔痒ノ念モ有之ヨリ表面高
藤相生ニ候姿ニ相認ヘ居何分不都合ニモ有之旁

卿ニ答ル書

ヶ輔ヶモ熟議此度之行同人ヨリ旦下ヘ面晤詳悉ノ筈ニ候左採御承知萬端無伏蔵吐露同人ヘ御忰議有之度然ル上者既往之儀ハ勿論将来事情鬱塞洪滞ガノ弊ハ萬有之間敷ト確認罷在候此際廟中諸般之政務細大相議シ弥懇篤盡力有之度此段自拙者得御意置候也

明治七年
七月廿二日

大蔵卿大隈重信

東京大蔵省ニ於テ

大蔵卿

大隈重信閣下

明治七年七月廿二日之御懇書五ル月曜日七月廿七日
相達シ難有拝受仕候迂者今日迄モ吉田殿
ト御面晤致サス候依テ最早御答書仕候儀
猶豫致シ難ク採掌仕候

如シ吉田ヲ輔殿ヨリ四月廿五日附ニテ拙者
ヘ贈ラレタル頗ル不快ナル御書状ヨリ此程好
マシカラサル往復ヲ歌セシニ付右御書状御取

定ニ相成候ハヽ貴書中御申越之通双方
ノ関係上都合能相纏リ度望ミヲ以テ御
同人トノ協議モ大ニ愉快ニ可有之ト存候
右書状之義ハ深ク失敬ノ事ト彼存候得
共猶書面上ニ御解ニテ御更正可有
之事ト希望致シ候拙者ニ於テハ律ニ関
係スル書付ノ意味ニ付横ク経験ノ廉有
之然ルニ只僅ニメモル事情ノ外知ラサルヤウ
見受ケラル、人ノ例言ニ依リ拙者條約之
儀ニ付決シテ拙者ノ説ヲハ相変ニ不申候
其上ニモ拙者在職既ニ長キノ日今日迄前
文ニ述ヘシ書状ノ如ク決シテ不快ナル体裁
ノ文書ニハ出會不申候
他日改メテ面目ヲ拙者ハ附属セラルヽ迄ハ
自分ノ事ヲ夫程迄ニ忘却セル人トハ寧ロ面
會ヲ避ケ候方ト存候儀ニ付テハ卿モ御驚
愕之様存候拙者真実ナル所望ハ一切
故障ノ儀モ速ニ取除ケ拙者共事務上
ノ事最モ懇親ニシテ且ツ満足ナル筋ニアレ
ガシト存罷在候也右御報旁誠恐頓首

千八百七十四年
八月一日　首長トーマス、ウヰルリヤム、キンドル

造幣權頭轉任之報告

大藏省

大坂造幣寮ニ於テ

造幣首長

トーマス、ウサルリヤム、キンドル、足下〜

今般造幣権頭遠藤謹助儀大蔵大丞轉任ニ付
後任之儀者石丸安世被任造幣権頭候尤同
人着坂迄者遠藤大丞ニ於テ寮務是迄之通
り取扱ヒ之筈ニ候此段自拙者及御通知候
也

明治七年
八月一日

大蔵少輔吉田清成

大蔵省

報告之請書

造幣寮泉布觀ニ於テ

大藏少輔

吉田清成閣下

今般石丸安世殿造幣掌頭拜命被致候趣
文譯公文御添御通達之貴翰正ニ拜受仕
候此段御報申上候也

千八百七十四年

八月一日

首長 トーマス、ウヰルリアム、キンドル

輔ヨリ接見ノ儀照會

造幣寮ニ於テ
首長
キンドル 足下ヘ

去月廿二日附ヲ以四位大隈ヨリ足下ヘ贈リシ書
中之趣ニ随ヒ造幣寮開係ノ事務ニ付面晤ヲ熟
談致シ度候間今午後第四時泉布観迄ヲ越シ有
之候様致度此段申入候也

明治七年
八月四日　大蔵少輔吉田清成

大蔵省

我レヨリ酋長ヘ贈ルノ書彼レ却テ書記ラシテ
答ヘシメ且ツ文中頗ブル敬ヲ失スル最モ不適當
ナルヲ以テ之レヲ收メズ我レノ書記ラシテ此理ヲ
糸解セシメ彼レノ書記ヲ返戻ス

千八百七十四年八月四日

泉布観貴寓

吉田大蔵少輔閣下

本日午後第四時閣下ヲ寓所ニ於テ酋長ヘ引合
接ニ儀ヲ申越之尊書只今拝受仕候ニ付酋長驚
愕致シ候段拙者ヨリ可申上旨被申付候就テハ
酋長ニ於テ去ル四月五日附閣下ヨリ軽海セ
ラレタル書状之代リ相當ナル書并解書拝受
致シ候迄ハ酋長詰所ニ於テ閣下ヲ指令可相成
何等之儀ヲ承ハリ可申用意被致候場所ニテノ

外堅ノ立面調相断リ候段不遺憾旨報申上候

々誠恐頓首

首長書記官

エイチ、ダブルユー、ブナーテー

接見ノ儀ニ付彼ヨリノ照會

大坂泉布観ニ於テ

大蔵少輔

吉田清成閣下

祥啓然者阁下ニ寓居ニ罷出候儀ヲ辞退致シ候
事ニ付其所以ハ既ニ申述候ニ付其他贅言ヲ要
セス候併シ去月廿二日附書状并本月二日之電
信中ニ申越相成候大隈殿之ニ所望モ有之候ニ
ニ付何時ニテモ ニテモ都合次第造幣頭詰所ナリ
者ノ詰所ナリドチラニテモ面会致ス可ク全
ク用意致シ居候ニ付此段申上候也

二号

是ヨリノ答書

千八百七十四年
八月五日

首長 キンドル

造幣寮ニ於テ

首長

キンドル足下ヽ

本月之貴書接手然者明日午前第十一時拙者ハ
造幣頭詰呼ヽ罷出可申候間同時同所ニテ足下
ヽ庖面晤可致相楽申候此段及ひ報候也

明治七年

八月五日

大蔵少輔吉田清成

彼ヨリノ再答

千八百七十四年八月五日大坂造幣寮ニテ

泉布觀貴寓

内件書

吉田清成殿

啓呈然者明日第十一時造幣頭詰所ニ於テ御面會之儀公然御指令有之致拝承候借「コロンビ」氏事閣下ト御面晤ヲ遂ケ候趣其砌拙者ヨリノ書狀ヲ寧ロ過激ノモノト御考慮被為在候由同人ヨリ承知仕候右者書狀中終令公然タル禮儀上敬接之外何々タルノ無之共十分御激怒ニ觸レ候廉無之時ハ恐クハ閣下ニ於テモ右様思召ハ

有之間布如シ右書状中取消致シ或ハ正シクス
ベキヶ所有之候ハヽ、拙者ニ於テ固ヨリ甘ンシ
テ改正ナリ取消ナリ可致候併シ閣下ノ御場合
ニテハ稍之レト相違仕候其所以ハ御國記中ニ
拙者ヿ信用スルニ不當ノ人物ナリト御認ノ相
成候右ハ英國ノ一良民ニ對シ最甚シキ誣告ニ
渉リ候儀ニ有之候右様ノ誣告ニ對シテハ今我
カ國語ヲモ知リサヌ一箇ノ人物ヘ話ルヨリ
モ猶一層ノ事ヲ詳明ニ記載スヘキヲ要スルハ
惑カナルヿ共ニ存候如シ右等ノ場合ニテ閣下
ト拙者ト地位ヲ異ニセハ右様ノ誤謬ニ付又記
錄中一二之辨解有之度モノト御祈望被為在候
儀ト相考申候如シ閣下ニ於テ拙者ト御同意相
成右様被成下候ハヽ、舊来之通御面會可仕候左
スレハ餘事ハ容易ニ相運ヒ可申候
拙者ニ於テハ何等之場合ニテモ閣下之御命ヲ
相守リ可申又拙者ヨリ道理上ヲ以テ御願申上
候義ヘ御一致被下候上ハ此御面會ハ永久ノ利
益ヲ生スヘキモノニ可有之奉存候右内件可申
上草ニ如此御座候

首長キンドルヨリ差出シタル七ケ條書

首長

トーマス、ウヰルリヤム、キンドル

拙者ヨリ歎願スベキ事件有之候ハヽ、無伏蔵何等之事ヲモ吉田殿ヘ通スベキ旨大隈殿ヨリノ御書状ニ隨ヒ左之七ケ條相認メ差出申候

第一條

拙者決シテ関係アラザラシ證書ニ依リ拙者條約書中之七ケ條ヲ廢棄スルトノ御企ニ就キ歎願致シ候矢張拙者奉職ヲ承允セシ是迄之七ケ條所望之儀ニ御座候

大藏省

第二條

取分ケ首長局ニ係ハル事件カ特別之職掌ニ付大蔵卿或ハ他ノ政府官員ヘ宛書状差立候儀首長之為メ要用ノ時ハ右返書ハ反譯公文共添首長宛ニテ御差立有之度尤右日本譯ノ方ハ造幣頭局中記録ノ為メ首長ヨリ造幣頭ヘ相回可申事

第三條

前條ニ述ヘシ首長ヨリ差立候一切之書類ハ右寫ヲ取リ造幣頭局中記録之為メ同人ヘ送リ可

申事

第四條

政府ヨリ首長ヘ與フル一切特別之諸命令等ハ第二條ノ如ク首長ヘ宛御差立有之度勿論造幣規則第五則中ニ掲ケタル一種ノ地金鑄造ニ付テノ命令ハ此限外トス

第五條

獨リ首長ノミヘ屬スル職掌ヲ行フヘク造幣頭ヘ命令スル旨今之体裁ヲハ廢来スヘシ否ラザレハ多分不滿足ノ結局ヲ来スベシ

寮中巡視之儀ニ付彼ヨリノ照會

千八百七十四年八月十日

永布観貴寓

大蔵少輔吉田清成殿

啓呈然者小生事昨今全ク閣下ノ思召次第如何
様共差支無之ニ付閣下ノ御都合ニ依リ直ニ造
幣寮中、御同伴御巡覧相成候ハヽ、幸甚奉存候
頓首

首長

トーマス、ウヰルリヤム、キンドル

大蔵省

例年試驗分析執行之照會

千八百七十四年八月八日

泉布観貴寓

大蔵少輔吉田清成殿

昨年中ノ貨幣試験之次第柄ヲ以拙者年報書中江掲載仕度存候ニ付テハ閣下當所ヘ御滞留中試験取行ヒ候方可然哉ニ存候

千八百七十三年之報告書中二十三葉ニ就キ當時取行ヒシ廉御承知可相成存候此段得貴意候

頓首

首長

キンドル

是ヨリノ答書

造幣寮ニテ

造幣首長

キンドル君

本月八日貴書中御申立之趣致承知候就テハ當
月十三日カ十四日両日中ニ拙者造幣寮ニ出頭
可致存候此段申進候也

明治七年八月十日　大蔵少輔吉田清成

千八百七十四年八月十六日午後五時三十分

日曜

謹啓然ハ報告書草稿幸業致候ニ付閣下之ヒ都合可然候ハヽ明月曜日午前十時ニ於テ高聴ニ入レ度ト用意罷在候別紙ヒ支モ無之拙者従来所志ヒ八来相整候儀ニ候ハヽ諸帳簿及書類ヵ照覧ノ為合ニ一度ヒ発送ト存候此段及ヒ照会候也

首長トマスのウイリヤムのキントル

大蔵少輔吉田清成閣下

大蔵省

大蔵省

大蔵省

千字文

大藏省

本月十五日石九造幣権頭著坂相成談案事務
遠藤大蔵大丞ヨリ引継相済候ニ付明十八日
火曜日ヨリ執務之筈ニ候此段自然者及ビ通知
候也

明治七年八月十七日　大蔵少輔吉田清成

メジョール。トマス。ウィリアムソン殿下

千号

千八百七十四年八月十八日

大坂造幣寮ニ於テ

大蔵少輔吉田清成閣下

貴簡拝讀然者今十八日ヨリ石九君ニ於テ寮
務ヲ取扱相成候段 閣下ヨリ御達之趣委細
承知イタシ候此段御請如斯候也

首長トマス・ウィリアムス・トル

本月一日付第八百九十六号書面政落手候陳者
大蔵少輔吉田清成其実出張之儀ハ既ニ拙者ヨ
リ容月廿二日付書中申入候条可被了解若之如
今日ニ至リ猶同人ニ対面各之次第洩ニ申越候
趣甚以不都合之事ニ候右者本月二日別段電信
ヲ以申入候通拙者之代理タル吉田清成申入候
四月廿五日付之書面ハ決而離京候ニ付右書面
ニ対シ五月二日付来書之趣モ有之候ニ付即日
月五日付ヲ以同人ヨリ報告并政府通リ差ヨリ

大蔵省

蔑之存意相挟候候儀ニ無之候間令服申立之趣ハ
断然難致採用候条萬ト得其意容月廿二日付申
入候書中之趣ニ准據シ速ニ同人ヱ面會篤ト可
遂協議候此段及回答候也

明治七年
八月八日

大蔵卿大隈重信

造幣寮首長
トマス。ウヰリアム。キンドル殿

明治七年八月二日電信

キャウノ　ダイリナル　ヨシダヨリ　シガツ　ニジフゴニチヅケデ
テガミシ　テガミノ　ウチニ　イロンアル　ヲモムキニテ
トリカヘシ　ノゾムト　キコユレドモ　ソレハ　ケッシテ
トリカヘスコト　デキズ　モチロン　ゾウヘイレウ
ゴムニツイテハ　コノタビ　ヨシダヘ　マカセ　ソノウエ
デバリシコトユヘ　ヨシダト　ジキダンセザレバ　ナニゴトモ
マトメガタシ　ソレユヘ　ヒテガツ　ニジフニニチヅケ　ソレヨリノ
テガミデ　イシトヲリナリ　ヨク　ヨシダト　ケフド
シラベレヨ

少輔首長應接聞書

大藏省

明治七年八月六日大坂造幣寮ニ於テ
大蔵少輔吉田清成首長キンドル應接
聞書　午前十一時始
午後一時十五分終

輔

足下近来我書翰中不敬ノ語アルヲ以テ不平ヲ鳴ラシ屡本省ニ抗議ス吾初メ不信大坂ニ来リ足下ニ面晤シ大蔵卿ノ意モ傳ヘ予モ亦タ予胷中ヲ吐露シ是レマテノ款結ヲ氷解セントス然ルニ足下予ト面晤スルヲ欲サルモノヽ似リ予是ニ於テ始テ足下ノ

真ニ不満之意アルコトヲ信用セリ敢テ問フ迄
下不満トスル所ノ主意何ツクニアルヤ
欤 僕先ツ根本ヨリ談セン先年僕時ニ魯西亜
國ニ在リ露敦東洋銀行ヨリ屢電信書翰等
ヲ以テ 皇國退幣ノ首長ニ任センコトヲ
往復スルモノ数ナリ因テ僕帰英直ニ銀
行ニ至リ条約ノ件業ヲ見ルニ条款僕ノ意
ニ適セス急ニ去ラレト欲ス銀行僕ヲシテ
随意ニ改正セシム因テ僕所識ノ法律家某
ニ托シ条約書ヲ記載セシム且ツ某ノ説ニ
随ヒ他日葛藤ヲ生セシ時ハ我本國公使ハ
ーク(アルビトレトル)等ヲ審断人(アルビトレトル)トスルコトヲ加載セリ又
銀行ノ方ニテハ縦令ヒ審断人アルトモ事
ノ模様ニ因リ本國ノ國法(コンモンロー)ヲ以テ裁判ヲ乞
ベキコトヲ加載セシト予是ヲ諾ス然リ而メ
僕ハ只銀行トノ条約アルコトヲ知テ又タ外
ニ政府ト銀行トノ際何等ノ条約アルヤヲ
決シテ不知而メ我自分ノ条約ヲ遵奉確守
スルノ外他事ナシ然ルニ前権頭益田孝在
職中首長権頭権限論ノ末日本政府ト銀行

トノ条約中ヲ引キ権頭十分ノ権利（子カ銀行トノ）
条約中明掲アル全ク予ニヲ有スルヿヲ始
屓スベキ権理ナリ
メテ聴了ス其時益田ヨリ右条約ノ寫ヲ僕
ニ示與セントテ云フトイヘ𪜈僕其条理失ス
ルヲ以テ不受取勿論僕着國ノ節至當ノ人ヨ
リ公然之レヲ請取リ一見セシモノナレバ
異論モ無カルベキニ着國後二ヶ年半余ヲ
経シ後写シトノミ聞キ之レヲ一見スト云
何カアラント思ヒ如此爾来不絶抗伝ヲ生
スルハ是レ全日本政府ノ我条約面ノ権利
ヲ剥奪セントス企望スルヨリ起レリト思フ

輔 足下在英銀行ト条約ヲ結フノ節日本政府ヨ
リ何等ノ権利ヲ銀行ヘ委任セシヤ否ヤヲ知
レリヤ且其委任状ヲ一見セシカ

欣 僕一切之レヲ見ズ又之レヲ不問蓋シ銀行
ハ英國中有名ノ銀行衆ノ信認スル所又僕
ノ親ク熟知スル所ノ者豈他日不都合ヲ生
スルノ恐アランヤト自カラ信用セシモノ
ナリ

輔 愚思フ足下問ハズ見ズニ付スルハ足下ノ失

錯大ナリト云フベシ縦令平生熟知スルモノト雖此大任ヲ擔當シ殊ニ萬里ノ外國ヘ行ノ」
卿其情實如何ヲ探リ
忽ノ所置ト思ハル如何
輔 儲テ去ル四月廿五日付予カ書翰中失敬ノ語
欣 他事ニ移リ敢テ抗論セズ
アルヲ以テ右書翰ヲ取返シ且ツ謝罪セヨト
ノ意アリト聞ク決シテ行フベカラズ足下是
非此ノ儀ニ付足下ノ意ヲ貫カント欲セバ我
モ亦足下當三月十一日付ノ文中稍権利ヲ犯
スニアルヲ咎メントスルノミナラズ今一
層遡ノボリテ最初東洋銀行ト政府ト結ビシ
条約論ニ渉ルベシ然ルすハ足下ハ足下ノ条
約ヲ主張シ抗論スベクト雖モ日本政府ハ又
タ銀行ニ厳ニ迫リ其不都合ノ罪ヲ責ムベシ
然ル時ハ到底困苦スルモノハ銀行一人ナリ
且真ニ銀行ハ不都合ノ条約ヲ結ビ政府ノ意
ニ違ヒ亦足下ヲ欺クニ庶カンラシカ此等ノ
情實足下那ンソリ回顧熟慮セサルヤ到底目今
ノ形状ニテハ速ニ協同従事ノ出来ル道理ナ

ク此上ハ政府銀行足下ノ三名熟議ノ上鼎足
協同ノ条約ヲ改正セスンバ往ト紛紜ノ絶エ
ル了決シテ有ルベカラズ故ニ互ニ大ニ耐忍
ヲ主トシ小過ヲ咎メス大業ヲ攀ルヲ以テ専
任トスル方可然ト思フ
欲
然リ僕モ亦タ之レヲ欲ス若政府此ノ如
ク迯意ヲ以テ条約ヲ改正ス僕豈其命ニ
従ハヂランヤ
輔
足下大蔵省ニ於テ米人ヲ[ナサルアムス]事ヲ取
リ纔キニ足下ニ送リシ書面モ同人ノ手ニ成

リ兎角我輩ヲ煽動シ足下ヲ愚弄スルト傳聞
スト雖モ決シテ然ルニ非ラズ彼レハ真ニ我
輩ノ書記官ニ似タルモノニテ現ニ彼往復中
多少予自カラ草案セシモノアリ且ツ予ニ於
テ云フベキ理アルト十分信用セシモノニテ
足下ノ抗論ヘ對シ弁解セシモノト知ルベシ
豈維廉武ノ失ナランヤ
又曰足下今度遠藤轉任石丸權頭拝命ニ付テ
ハ政府ノ意足下ト飽マテ議論ヲ起サシムル
モノト想像スルヤニ見ヘタリ是レ全ク然ル

ニ非ズ抑遠藤昨年拝命以来再三其任ニ不堪
ヲ以テ辞職ヲ願フ因テ今度轉任ヲ命セラレ
シモノナリ又タ石丸氏ニハ政府ニ於テモ至
當ノ任ト思フホドノ有力者故ヘ其任ノ上ハ
自然豆下ニ於テモ協和寮務ニ同力致サル、
コトモ出来スベクト確認ス
欣然テバ償冀フ所ノモノハ四月廿五日付並
一番終リノ書簡中頗フル軽蔑ノ文意アリ
トモ全ク其意想ニ出タルコニ非ストノコト
ナレバ拙者ニ於テハ最早是レヨリハ何ノ

異存モ無シト
輔
勿論ケ様ノ意味ヲ含メシムルノ意ヨリ出タ
ルニ非ザレバ強テ可否上喋々論ヲ俟ツベキ
ニ非ズ無論以往ハ寮務上ハ勿論其他ノコト
至ルマデ同心協力セザルベカラズ
以上
右之外銅銭局硫酸局銭道枝線ホ之件ニ長談
アリトイエドモ緊要ニ非ザルヲ以テ略ス

石丸權頭ヨリ寄スル書ノ寫

大坂造幣寮ニテ
造幣首長
トーマス、ウオルリマム、キンドル君

致啓上候然者拙者今般造幣摧頭ヘ拝命致シ
候就テハ両三日中大坂表ヘ出立之心得ニ罷在
候偖寮中ノ諸事艱親ニ委分シ一切之事件
成ル丈平穏ニ落着致シ度懇望ノ至リニ堪ス
候此儀ニ付テハ足下ニ於テモ御同意御輔
助被下候儀ト敢テ存念之事ニ候扨又前
條之儀足下御管下ノ外國諸士官ヘモ御通

達被下候ハ、幸甚之至リニ存候右御報
申進候也

明治七年七月廿九日　東京大蔵省

造幣権頭石丸安世

石丸権頭へ答ル書ノ寫シ

大蔵省

東京大蔵省ニ於テ

造幣摧頭

石丸安世殿

去月廿九日附貴翰披手拝読致シ候然者今般
造幣摧頭御拝命之趣并萬事懇親ニ委分
可致御所望之旨御演述相成詳悉致シ候
右ハ拙者ニ於テモ真實御同意之事ニ御座
候乍併右之一事ハ全ク足下及ヒ政府次第
ニテ相行ハレ候儀ニ御座候如シマ拙者ノ條
約依然トシテ廢棄セラレサル以上ハ困難ノ事

迚毛頭無之事ニ御座候扨右條約之内足下此度御拝命相成候御職掌ニ関係之一ヶ條丈書抜キ差出ス筈ニ致陳述候

惣テ造幣頭ノ責任ヲ有スベキハ計算局ノ事務タルベシ

造幣頭ハ凡テ政府人民ノ地金取扱ノ事ヲ行ヒ又通用之為メ首長ヨリ前ノ人ヲ免許シタル鋳造貨幣ノ受取渡シ一切之事ニ付日々官員之衆分ヲ為スベシ併シ乍ラ造幣頭首長ノ職掌上ニ拘ハルベキ権力

毫モコレアル可カラス首長ハ造幣頭ノ職掌上ニ又少シモ拘ハル可カラス

首長モ造幣頭モ各我レニ委任サレタル職掌ノ為メ猶リ政府ニ対シ責任ヲ有スベシ

（此文按書ト相見候譯者記ス）

右ニ依リ即今拙者ニ於テ思察スルニ是迄當所ニテ差起リ候一切不和之事ハ皆首長ヲシテ虚位ヲ取ラシムベキノ企テヨリ生セシナト充分ニ存候右者如ク足下首長之意見御兼知ノ上ハ首長ニテハ右等ノ事ニ決シテ服従スル

意無之義御見留メ可相成候又足下大隈
殿ト御熟議之上ヲ以テ近来往復ノ顛末ヲ
御承知相成拙者之職掌ニ関シ足下真
実之御職分ヲ御會得相成ル為メニハ拙者
之意匠等ヲ御参考之度存候足下如
シ大隈殿ト共ニ造幣寮之事務ヲ動揺セシ
メス拙者之條約面ヲモ廃弃セサルトノ御趣
向ニ候時ハ決シテ将来故障之起ル所以モ
有之間布候如シ左モ無ク政府ニ於テ猶是
迄之流儀ニ引續ケ候方適當ト被思召候
節ハ拙者ニ取リ各々敷事共ニテ不満足ノ外
何ニタル仔細無之唯當國ヲ出立シ歸國之
事ヲ思フノミ右歸國ノ事身体上之損失ナ
ク拙者條約面ニ差支無之ハ速ニ出立スルハ一
箇ノ療養ト存シ候ニ付リ下テ近頃大隈殿ヨ
リノ御書状之趣ニテ語り双方相當ノ理會
ニ相纏マリ可申トモ希望被致候

大蔵少輔ヨリ昨六曜日拝受致シ候足下
御拝命ノ報音既ニ當察ニ於テ記録致シ
置候其他何ニモ要用之事無御座候忙

大蔵省

ヽ頓首

千八百七十四年

八月三日　首長トーマス、ウヰルリアム、キンドル

遠藤大丞ヘ贈ル書

造幣寮ニ於テ

遠藤君足下

拝啓然者足下将ニ造幣寮ヲ引取可相成トノ
由ニ而厳并足下ヨリ公然ノ報告之趣頃ル遺憾
之至ニ存候扨拙者日本ヽ滞留之餘日モ今暫時
之期限ニテ其間ハ右様之変更無ク過キ行キ可
申ヌヒ希望致居候是レ全ク當時日本官員タル
モノ同政府之下ニ奉職ニル外四人ニ接スル氣
合ト意気トニ窓シ今亦新任ニ人ト新交ヲ結フ
コニ付テハ拙者ヲシテ畏避思諱之意ノ生セン

門件書

ハル所以ナリ

凡ソ日本人ハ外国人ノ一生涯力ヲ用ヒ漸ク成功セシ事業ヲモ僅ニ三時間ニシテ直ニ通暁シ得ル抔自負セル權力ト并右ノ如ク戯術ニ類セル事業ヲ日本人ハ容易ニ仕遂ケ得ルトノ信用ト以ニケ條ハ即チ外国人ノ對シ常ニ自負シ外人ヲ軽非シ厳津スルノ根本ト成レルモノナリ

故ニ前條変更ノ事ニ付拙者之ヲ避恐譚スル所以ニ下ニ於テハ容易ニ了解可相成哉ト存候（ヤ疑イ）

（コノ辞ハ日本ニテ日ヽ備作スル下等

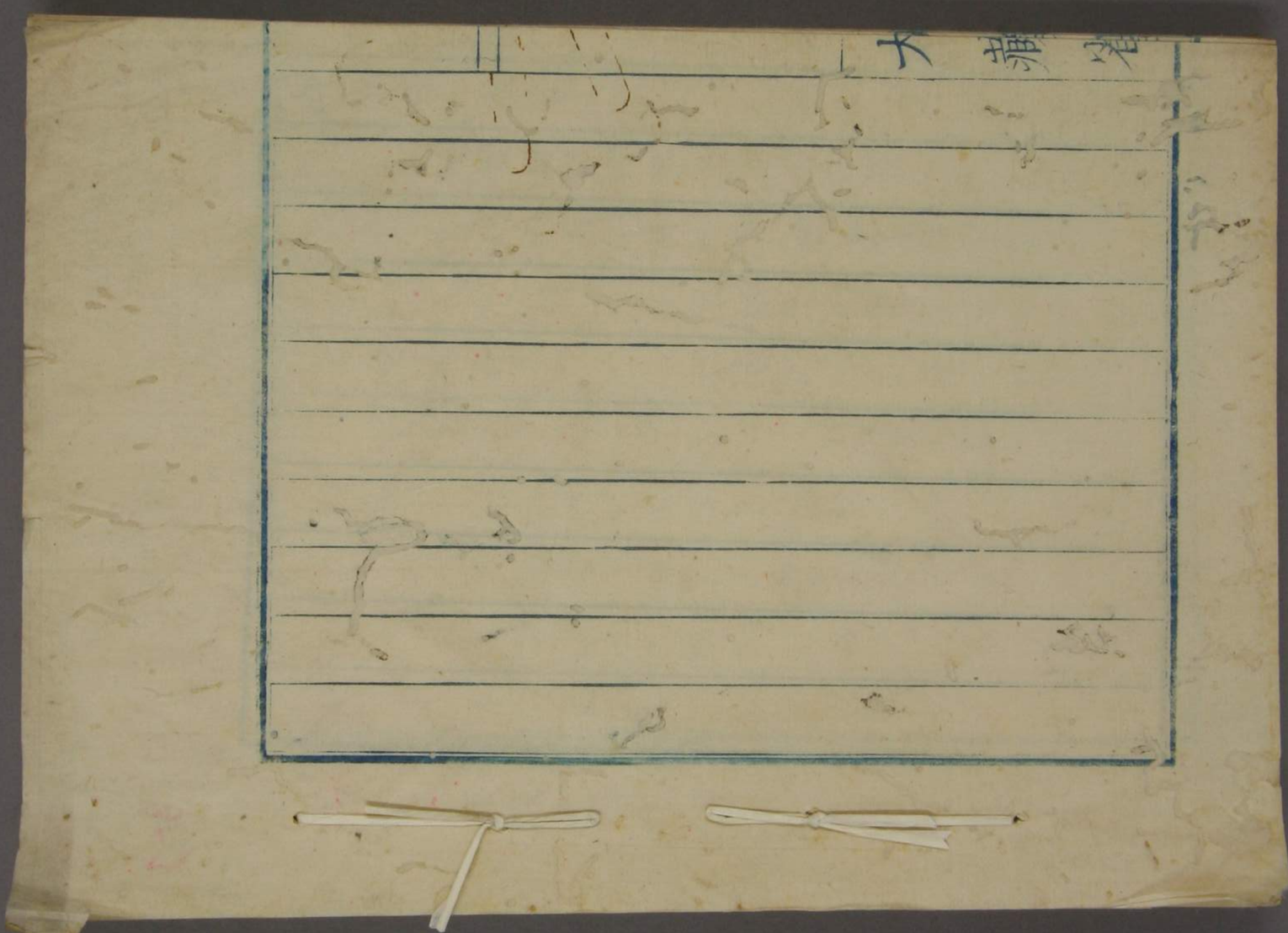
ノモノヽ用ユル辞ノ如キ拙者ニ致承知居候之名義ヲ以テ拙者ヲ被為目ヽニ付テハ是下後任ノ人ト雖前條ニ述ヘタル如キ文明ノ意見ニ澤者曰ク文明ノ意見トハ及對ノ意味ト知ルベキナリ

ヲ以テ急ヒノ間ニ無限ノ困難ヲ惜カニ引起ス可キ様ノ所為アル人ト致洞察候如ク夫レト反シテ同人事ハ專ラ同人之自局ノミノ心ヲ用ヒ拙者ノ職掌ト拙者ヲシテ獨立ナラシメハ諸般之事悠ニ正道ニ而運ヒ可申候

去リ乍ラ爰ニ慰心ノ一事アリ其要ハ拙者ヨ

本ヨリ出立帰国セハ勿
論意ニノミ随ヒ公然ト拙者ノ節重ニ応接ス
ル兎角政府ニテ拒抗被致候義モ速ニ於リトナ
リ六拙者身体上ニ付蔑視之憂モ止メ旁仕合ト
被存候
如シ足下欧州ヘ御遊行相成候節ハ「ジュニオル、ユナイ
テット、セルヴィス、クラブ、チャーレス、ヒイント、ロンドン」地名ニ於テ
拙者之宿所常ニ御承知可相成存候足下御遊行
之節御承知致シ候上ハ拙者ニ於テモ再ヒ御面會
ヲ得只管幸甚之至リニ堪ス且拙者之及ノ丈ハ
如何様ノコトモ御世話可致候抑足下之御職
ニ於テハ自今速ニ御帰朝ニ相成候事ハ一日モ早ク
引離レノ御職務ヨリハ一層御煩雑無之様ニト
希望致シ候扨又職務上拙生共之間自ラ権限相
戻ルコトアルヲ知ラサル体ニテ東京表ヨリ派テ
足下ヘ命セシ是迄ノ御職務上ニ付拙者ニ於テ
ハ足下ヘ対シ決シテ不快之意更ニ無之候間何
卒向後共絶ヘス御左右承知致度如シ足下大坂
ヨリ御出立後ハ直ニ面會致シ候節ハ必ス真筒
タル親友ニ有之候間其ヘ信用致シ候右ハ報旁ノ

件迄帳ニ頒首

平八百二十四年

八月一日　酋長キンドル